

育てよう、

—小さなギャラリーの

下口豊子

伝右衛門の情熱で再興した
九谷焼

今年の十月、加賀市と江沼郡山中町が合併する。新石川県加賀市の誕生である。藩政時代ここは加賀前田家三代利常の三男利治を祖とする大聖寺藩であった。その意味では再び一つになったことを私は素直に喜んでいる。かつて北前船で栄えた塩屋の港から大聖寺川を遡ると山中温泉、そしていくつもの村々を経て大日のふもとに至る。ここに世界の至宝ともいわれる古九谷を生んだ九谷村があった。私の夫はこの村で生まれ育ち、小学校六年生の時大聖寺に出てきた。今この村は九谷ダム建設のため廃村となった。

藩祖利治が殖産興業策として力を入れた色絵磁器の製造は、一六五五年(明暦元年)ごろ九谷村で良質の陶石が見つかったことで始まったが、わずか半世紀ほどで閉窯した。

雪深い山奥の村で焼かれた古九谷。斬新なデザイン、自由奔放な筆遣い、釉薬の深みなど当時から既に



石川県九谷焼美術館所蔵
「古九谷 色絵百花手唐人物図
大平鉢」

パトロンシズ
さよやかな夢

高い人気があった。大聖寺藩の外交の主役として、藩邸での饗応膳の上で用いられていたのだらうと思う。もしかして將軍家や他藩への進物としても大いに面目を施したに違いない。大聖寺藩の誇りだった。

閉窯から百年を経た一八二四年(文政七年)、古九谷を再興しようとして立ち上がったのが大聖寺の豪商吉田屋伝右衛門だった。この時彼は七十二歳。大聖寺のはずれの小さな村で隠居生活を送っていた。いかなる情熱が彼を動かしたのか、古九谷の青手様式を復興したこの窯は吉田屋窯と

呼ばれ、今日の九谷焼の礎となった。

茶道に造けいが深く、歌を詠み、自ら文人画をも描いた彼の美意識にかなった職人集団を抱え、素地作り、意匠・デザイン、釉薬の吟味に至るまで関わったと思われる。今ならさしずめ、チーフプロデューサーといえようか。伝右衛門と名工粟屋源右衛門、鍋屋丈助、越中屋幸助たちによって数々の名品が生み出された。彼はその殆どの財産を再興九谷に賭けた。普通なら静かな余生を送るはずの、伝右衛門が見せてくれた情熱と気概のドラマこそ、今日の九谷焼

京都への近道

の原点なのだ。私は心ひそかに彼の生き方に憧れている。

九谷村は交通の要所であったらしい。戦国時代には蓮如の四男蓮誓が布教の拠点として九谷坊を建てたといわれ、石川県埋蔵文化財センターによって二百人規模の屋敷跡や、山の清流を利用した水洗トイレ跡が発掘されている。

金沢から、鶴来、九谷を通り福井に抜ける山道があった。京都への近道で、脇街道というのだそうだ。異変があった時は軍隊が駆け抜けていった。その時の略奪に備え、村々は隠し小屋を山奥に建て、食料と女子供を守ったと伝えられている。

九谷村の奥に真砂という集落があり、木挽き人が住みつき、今日の山中漆器の歴史はここから始まった。山の民はいにしえから日本の山々を自在に行き来していた。今でこそ山奥と呼ばれる過疎の村々だが、脇街道という道の存在は謎めいたロマンを感じさせてくれる。

過去と未来をつなぐ ホットなギャラリー

三年前、加賀市大聖寺に石川県九谷焼美術館がオープンした。

九谷焼を核にしたまちづくりを、と平成二年九月九日設立された「古九谷研究会」が中心になって進めてきた市民運動の結実である。夫とともに私もその初めから深く関わってきた。公園の緑に囲まれたこじんまりとした素敵な美術館だ。いろいろな仕掛けのある三つの常設展示室と企画展示室があり、二階には茶室も設けられている。

館長は大聖寺出身の作家高田宏氏。暖かなホスピタリティに満ちた運営を進めている。

そして「古九谷研究会」は発展的に解消され、NPO法人『さろんど九谷』が誕生し、美術館のサポート活動にあたっている。

『さろんど九谷』が運営する『茶房古九谷』は大聖寺の人気スポットとなった。上質の山中塗りのお盆に季節のあしらいと共に、オリジナルの茶器で供される月替りの日本茶と中国茶。季節の生菓子とともに頂くお抹茶。ゆったりとした贅沢なひと時だ。

ここは地元の九谷焼作家の作品を紹介するギャラリーでもあり、そこに私達のこだわりがある。伝統はただ受け継ぐだけではない。今日的な創意があつて未来に継がれる

ものだ。この美術館は過去（一階展示室に飾られている古九谷や吉田屋の名品）と現在と未来をつなぐ役割を担っている。「茶房古九谷」はひとつのテーマで新作を競い合う、現代九谷作家たちの魅力を味わえる今一番ホットなギャラリーだろうと思う。

技術革新こそが 九谷焼作家の魂

ここ加賀の九谷焼作家の特徴を挙げれば、それぞれが濃厚な作家魂を抱いているということだろうか。器に描かれた絵画ともいわれる九谷焼は、作家独自の美意識で新しい画風や様式を生み出してきた。それこそが古九谷の伝統精神だろう。それは一言で表現するとイノベーション（技術革新）の精神である。作家たちは皆、古九谷や吉田屋を愛しながら、時代の最先端の美意識を表現しようとの模索を続けている。有名無名を問わずその点で私は加賀九谷の作家たちを誇りに思っている。私が大聖寺の町で小さなギャラリーを開くことになった一番の動機だ。

不思議な縁というのか、私のギャラリーは十数年前まで、古九谷を生んだ九谷村に建てていた土蔵である。林業に生涯をかけた義父が自ら切り出した栗の無垢材で建てた堅固な造りだ。焼き物も木製品も、油絵やガラス器もこの空間にびたりと収まる。

今、パトロンシップを!!

今日の作家たち、特に高度で緻密な技術と時間を必要とする工芸作家にとって、パトロンの不在は致命的だ。いいものを作っても売れない。売れなければ次は作れない。そうしていつの間にか伝統工芸が廃れていく。

藩窯であった当初は大聖寺藩がスポンサーであった。豪商の存在もあった。いいものはそういう背景のもと生み出されてきた。私は、自分ももし大金持ちだったらいつも夢見る。これはと思う若い才能のパトロンになって、九谷焼の、あるいは山中蒔絵の凄いのを生み出してもらおうと。けれどこれは到底実現できそうもない。私にできること、それはパトロンシップ（作家を支える、励ます精神とでも言おうか）の輪を広げることだ。

パトロンシップとは何かといえば「作品を買う」ということだと私は思う。

個展―エキシビションは、もちろん作品を観てもらう場ではあるが、同時に作家の生活を支える経済行為でもあるのだ。作家にとって、売れるということがどれほど嬉しいことか、物心両面での充実感が次の作品を生む原動力となる。

生活必需品が百円ショップで何でも揃い、そうかと思うと外国の高級ブランド店に行列がつくこんな時代。地元の身近な作家たちが精魂込めたいいものを、思い切つて買ってみませんか。いい物を日常に使う生活をしてみませんか。

作品を買うことが、伝統工芸を支える第一歩。大金持ちでなくても、パトロンになれる。小さなパトロンシップの積み重ねが豊かな文化土壌を育んでいく。小さなギャラリーで抱いた私のささやかな夢だ。



下口豊子 (しもぐち とよこ)

昭和23年仙台市生まれ
エッセイスト
平成12年第1回『雪の華文学賞』受賞
エッセイ同人誌『風媒花』同人
加賀市大聖寺で地元作家を紹介する「ギャラリー萩」を開く

石川県九谷焼美術館
TEL (0761) 72-7466
HP <http://www.kutani-mus.jp/>

青手：緑・黄・藍などの釉薬で器全体を塗り込める
古九谷様式の一つ。赤は決して用いない
(事務局注)